

実践を通して中学部時期に育てたい力について研究を進める

中学部学部研究

はじめに

今年度の中学部の生徒数は46名です。ここ数年の傾向として、本校小学部出身者を超えて、地域の小学校からの入学生が増えてきています。また中学校からの編入学も若干みられます。

生徒実態の特徴については、各年度毎に変化はありますが、今年度は重度重複9名、知的障害15名、自閉症スペクトラム22名です。それに伴い集団編成上、あるいは教育活動全般に関して以下のような課題があげられています。

- (1) 重度重複障害の生徒(車いす)が少なく、集団編成を組むことが難しい場合は、学部を越えた取り組みを模索している。また年度によっても増減が著しく、変化が大きい。
- (2) 地域からの生徒については、知的障害だけでなく、ADHD、ASDの傾向を併せ持つ生徒も増えており、その実践的課題については様々である。障害特性の理解と合わせ教育環境や教育内容の充実と検討が必要である。
- (3) 生徒自身また保護者も含めて障害理解という点での課題が顕著であり、教育的にニーズも多岐にわたる。支援学校としての意義と教育についての理解を深めていきたい。

1. 研究テーマにかかわって

全校テーマ「自分らしく人とともに今を生きる ～ それぞれのステージ毎に育てたい力を考える ～ 」というテーマに沿って、中学部では、

実践を通して中学部時期に育てたい力について研究を進めるとし、まずは日頃の実践をふり返ることを第一に、そこから改めて「育てたい力」を考察していくこととなりました。

その経緯として、一つ目に「少し大きな集団での友だちとの学び合い」という中学部らしさを生かした教育課程を設定するなかで、長年、「合同学習」、「学部集団づく

り」の学習が継続して取り組まれています。その意義を改めて見つめ直し、授業改善へと進めていく必要があります。

二つ目に、各クラスの中心的な学習となる「課題学習」についての実践検討と合わせてクラスを越えた生徒実態や教育課程の交流を進める中で、学部全体の共通理解を深め、実践力を高めていくことが大切です。

最後に、教職員集団の世代交代が大きな課題としてあげられます。集団論議を徹底しつつ、まさに「今を生きる」教育課程の創造が求められています。

2. 研究活動の経過と研究内容

年度	テーマとおおまかな内容
平成24年度	キャリア教育とは何か 進路学習会の中から (卒業生から学ぶ進路学習会) 授業研究 定本Dr.「ADHDのある生徒の生活と学習」 小谷Drを招いてのケース研
平成25年度	中高生のキャリア発達についての研修会 (湯浅恭正先生を招いて) 指導要領についての学習 育てたい力についての考察 I ・課題学習とは ・課題学習の授業研究を通して (中3、6組の調理、木工など) 小谷Drを招いてのケース研 (ASD)
平成26年度	渡辺三枝子先生の講演会 卒業生から学ぶ進路学習会 育てたい力についての考察 II ・合同学習の実践検討 (合同ランニング・合同校外学習) ・「思春期」という時期について 小谷Drより 各グループの現状と課題について ・グループでの育てたい力の交流 ・課題学習についての実践検討 小谷Drを招いてのケース研

※ 上記以外に例年、教育課程の作成、交流、検討が含まれています。

3. 研究のまとめとして

先の表のなかから、以下の点を中心に、論議のまとめとしてその内容について紹介します。

(1) キャリア教育とは何か（平成25年度）

研究テーマの検討と合わせて、「キャリア教育とは何か」について話し合うことからはじめました。学部の話合いを進めるなかで、「今」という時期について、「今とはどこの時期のことをいうのか、混沌とした社会に生きる今なのか、今の生徒を充実させることか」という質問から、「今の積み重ねが将来の積み重ねになる」、「今を生きる生徒が自分らしく生きること」という意見へと繋がっていきました。

また「マンパワーがあるなかで、十分に手をかけて、いろいろな経験ができるのが学校である。今の時期に様々な経験を積ませてあげたい」という意見も出されました。

一方で「キャリア教育には抵抗あり、職業教育にはめ込むとしている。中身は否定しないが、育てたい力とは何かについて考えていきたい」などの率直な意見も出されました。このような話し合いのなかで、中学部としては「育てたい力」をまとめる方向で、上記の研究テーマに向けて研究を進めていくこととなりました。

(2) 進路学習会の中から（平成26年度）

例年進路部と連携し、「卒業生の姿から学ぶ」と題して学習をすすめてきました。26年度は主に「就労にかかわる現状と課題」の学習と、事前に集めた進路学習に向けてのアンケートをもとにすすめられました。

NPO法人ENDEVOR JAPANよりワークチャレンジスタイルGOKENDO事業所の松浦一樹氏の講演より、企業側からみた障害のある人の就労についての現状と課題、合わせて独自の取り組みについてのお話をビデオで見ました。

① お話のなかから出てきた諸課題として

- ・福祉就労から一般就労への移行は、1～3%くらいしかないこと、就労継続A型などステップアップしていくことができる場がもっとあればよい。
- ・離職率は障害者の50%、アフターフォローが大きな課題である。

- ・工賃の問題など。

② 大切にしている点および学校への要望として

- ・エンデバーでは、就労継続B型→A型→施設外就労(企業就労)のような形をめざしている。
- ・目の前の生徒と向き合い、一緒に考え、最終的に生徒自身が進路を決定できるようにしてほしい。
- ・自分で目標を達成するための個別支援計画を立てる。
- ・学校家庭本人が同じ方向で進められるようにする。
- ・就労支援の事業所が中間的な役割を担ってほしい。等の内容が出されました。

③ 学部アンケートから

テーマ「企業側からみた育てたい力に関して企業や施設で働くためのに必要な力として大切なことについて」

- ・日常生活での身辺処理、基本的な生活リズムの確立、健康管理。(生活の力)
 - ・仕事をしたいという気持ち。(意欲 気力)
 - ・欠勤、遅刻をしない。(自己コントロールの力)
 - ・仕事を理解して集中力、持続力を維持して作業することができる。(工夫する力 基礎体力)
 - ・必要なときにまわりの人に援助が求められる。
(コミュニケーションの力)
 - ・人と関わり、適切な関係を作ることができる。
(人間関係の力)
 - ・仲間と力を合わせて取り組むことができる。
(協働の力)
 - ・趣味や余暇活動を持ち、気分転換できる。
(余暇利用の力)
- などがあげられました。

(3) 課題学習の授業研究を通して（紀要47）

一 中3組「調理・野菜のためのとりくみ」

1) 報告内容

3組(冊子の表では4組)は主には発達の6、7歳の課題を持つ中度知的のクラスです。ADHDや自閉症、てんかんを併せ持つ生徒たちでもあります。中学部のなかではリーダー的存在として位置付き、学部の行事等では進行役として奮闘しています。今回は「いのちとからだ」という主題での課題学習の一環として調理に取り組んだ

報告になっています。

ア 学習計画

- ・自分のやり方で作る
- ・振り返りとレシピづくり
- ・材料の買い物
- ・レシピに沿って、ペアと調理
- ・振り返り、見直し、ひとりで調理
- ・夏休みの宿題

イ 学習のねらい

- ・レシピを作ることができる。
- ・レシピにそって 調理ができる
- ・一連の活動に見通しを持つ。
- ・友だちと協力する。
- ・やったことをふり返りことばでまとめる。
- ・家庭生活のなかで生かす。

ア、イに関しての特徴点としては、ひとつは「ふり返り」の活動です。できた結果を見直してみること、してきた経過を見つめ直すことなど自分の活動を振りかえる機会を大切にされています。またそれをことばでまとめていくことなど、「国語」ははじめ教科の力への働きかけも落とせない課題です。

もうひとつは友だちのかかわり合いです。相談しながら役割分担すること、実際に作業を通して助け合うこと、また味見をし、批評し合うことなどを通して、相手を受け入れつつ自分の思いを調整していくことなど、このクラスだからこそこの学習であると感じました。

2) 論議のなかで

ア 学習のねらいにかかわって

- ・技術面(切り方等)の向上はどうするか
- ・生活に生かすとはどういうことか

イ 授業づくりのポイントに関して

・ペアが生きる活動の組織

どんな学習も取り組みも対人関係の充実・拡大が最優先のねらいになることが強調されていました。そうであれば、どの生徒とどの生徒をどのタイミングでどんな活動を通して、どんな関係づくりへとめざしていくのか、またそれがクラス集団づくりと有機的に関連していくのか、自然発生的でなくどう仕組んでいくのか等更なる検討が必要であるという発言がありました。

・くり返しの活動

「わかってできる」ことを大切に、自分で行動できる力をめざしたい、それは自分でできたという達成感を持たせることをもねらっています。より確実にできること、できたことを実感するためにもくり返しの活動が重要であることが出されました。

くりかえすことで、前回よりさらにうまく、スムーズに、また自分のがんばりどころを意識できることも大切であり、前述にあった「振りかえり」の力とも関連していきます。

障害の重い生徒については好きなことや心地よい感覚、感触を取り入れながら、くりかえし活動することで、イメージする力や期待する力を強めていくこと、もう一回したいという意欲へと繋がっていくことなどが他の実践報告のなかでの論議にもありました。

合わせてそれは一定期間集中して取り組む課題学習の学習形態のめざすものでもあり、改めて課題学習について深めていくことの大切さを実感しました。

・レシピの活用

「わかってできる」為の手立てのひとつに「レシピ(手順書)」の活用が挙げられます。ただその内容は生徒の実態によって違っているようです。映像や絵など視覚的の手がかりや端的なことば(文章)での表示は当然ながら、一つ一つの作業毎の掲示か、先を見通せる流れにそったものかなどクラスの具体的な実践を通して工夫されていました。このようなことの交流も含め互いの学びが必要です。

ウ その他論点など

- ・家庭科として設定できないのか。

このような授業研以外にも、例年「課題学習」とは何かについてのそもそも論をはじめ、各年度の教育課程のまとめをつかつての実践の紹介や交流をすすめています。冊子のなかにはその一部がまとめられています。

(4) 合同学習の実践検討

中学部では長きに渡って、学部全体で取り組んでいる合同ランニングと合同校外学習についての授業検討、および学習のねらいを確認し、再度育てたい力について検討しました。論議のまとめは以下の通りです。

1) 合同ランニング

ア 学習のねらい

- ・各自の目標を決めて走る
- ・最後までがんばる力を育てる
- ・友達の流れ(渦)にそって走る
- ・がんばる友達を応援する

イ 育てたい力として

- ・からだの力
- ・人や集団を感じる力
- ・コミュニケーションの力
- ・最期までやりきる力
- ・目標を達成しようとする力
- ・気持ちを持続させていく力



合同学習に関してグループ研で論議したことは、各合同担当へ生かされ、授業改善へと進んだものもあります。

一方で全校研での「中学部の教育について」の論議のなかで、「中学部は合同が多く、自閉の子どもたちには不安である」という他学部からの端的な意見も出されました。

学部として、この学習がさらに意義あるものになるよう、「中学部らしさとしての教育課程のあり方について」充分な論議と検討をつくしていくこととなります。

(5) 「思春期」という時期について

「思春期学習会」と銘打って、次のような点について研修と研究を組み立てていきました。

1) 小谷Drを招いてのケース研と思春期学習会

かれこれ3年近く、小谷Drにお世話になり、事例研究を行っています。事例については事前に研究部を中心に学部で決定をしていきました。学年は二年生、生徒の実態もおおかつかみ、共通理解がすすんだ上で、なおかつ指導上困難や課題を要する生徒を中心にまとめていきました。小谷Drに指導に対するご助言やその他の事例を話していただくことで、私たち自身が障害理解を深め、日々の実践をふり返る貴重な機会となっています。

今年度の事例研としては、認識的には7・8歳の知的障害を伴う女子生徒を中心に、対人関係に課題があり、選択性緘黙・摂食障害の傾向があるなどの事例をあげ、「思春期」の課題とともお話していただきました。自分が困っていても気づかない、伝えられない、恐怖の域に達するほどの不安感を持つこの生徒に対して、一対一

2) 合同校外学習より

ア 学習のねらい

- ・抵抗に応じた柔軟な身体の使い方を獲得する
- ・見通しを持って最後までがんばる力を育てる
- ・筋力、歩行力を伸ばす
- ・ペアに合わせる力、自己コントロールの力を育てる。
- ・ペアを中心に共感しあえる関係を培う。

イ 育てたい力として

- ・からだの力
- ・相手を感じる力
- ・相手に合わせる力
- ・コミュニケーションの力
- ・最期までやりきる力 見通しの力

の関係から他者との信頼関係を築いていくこと、自分の役割を明確にすること、過去の自分と今の自分を振り返る取り組みが必要なことが伝えられました。思春期・青年期になると身体や心の変化、異性への思いなどの悩みも出てきます。人とのコミュニケーションの一環としてどのように付き合っていくのかなどの取り組みも必要となります。そのような時期にあることを私たちは意識する必要があります。また近年このようなタイプの児童・生徒が地域の通常学校や大学でも増えていることの事例の紹介もありました。人への信頼関係をどう切り結んでいくのかが一つの大切な鍵であることを学びました。

2) 思春期の現状と課題について

思春期をどう考えていくのか、障害や発達から見た現状と予測される課題について、各グループでの論議を交流し合うことで学習を進めていきました。

① 重度重複(中1組)

生徒たちの現状から

- ・第二次性徴のきざし

身体の変化は大きい。

下半身の筋力アップと安定→歩行力が増していく。

- ・興味関心の拡がり

友だちに向かう、特に異性への関心がでてくる。

アイドルなど好きな音楽やグループができる。

要求・主張が強くなる。ハッキリしてくる。

生活全般は母(大人)へ依存せざるを得ない。

今後の課題として

- ・からだの大きな変化に伴う

変形 拘縮 など

- ・要求、自己主張に関して

自己主張の拡がりとその表現方法・受けとめ

- ・人との関係について

人への(友達・先生)拡がり

密着型のかかわりをどうしていくか。

② 知的4・5歳(中2. 3組)

生徒たちの現状から

- ・4, 5歳の発達とは

自我の充実を図り、自制心をつける時期

自分と他者との比較とふり返りを大切に

ただ自分の基準はすべて先生の基準になってし

まう

- ・好きという気持ちが芽生えるが表現がうまくできない

例 好きだからパンツが見たい、好きだから見せたい

好きというのは結婚すること、逆に嫌いは全ての

ことに怒りを感じてしまう 等

- ・性への関心が拡がるが極端な表現になる

- ・男の子同士の身体接触が目立つ

今後の課題として

- ・自我の充実拡大

- ・していいこと、いけないことへの指導の徹底

- ・問題行動の共通理解

- ・実態に即した性教育の実施

③ 自閉症 発達的には2歳～4、5歳(中6. 7組)

生徒たちの現状から

- ・集団や仲間関係の形成発展

- ・母子分離と自立

- ・自己意識の獲得

- ・性同一性の獲得

自分は自分であること、こんな自分でよいという自己肯定感を持つこと、そして自分らしさを実感していくこと。また男性女性という意識が持てることも大切である。しかし障害からして、人との関わりのなかで多くの矛盾を抱えていることが多い。

今後の課題として

- ・問題行動として

- ・二次障害等の重層化

- ・母子分離について

自立への願いと葛藤

- ・思春期の生活づくり

- ・自分らしさの追求

この報告については文書をもとに発言があり、思春期全般について考える機会となりました。

④ 進行性の障害がある生徒(中4組)

生徒の現状から

- ・思春期に伴う身体の変化と合わせて、マイナスの変化がある

筋力の低下

生活のなかでできないことを実感していく

・障害理解

他者を通して自分とのちがいを感じていく

・集団づくりに関連して

自分の思いが出し切れない

横のつながりが無い、作れない

・家庭の環境、生活の固定化

したいことができない

自立という課題とのなかでの今後の課題として

・内面の理解を

心の揺れや変化をつかむ

受け入れやすい時期として

・この時期の障害理解として

長二中との交流を通して

・クラス集団づくり

安心安定の関係づくり

上記のように、思春期の課題は、障害や発達からして様々であり、それへの切り口や手立てにも違いはあるものの、思春期の身体の変化や心の揺れ、また要求をどのように受け止め、引き出し、実現させていくのか。自己の認識を高め、自分らしさへとつなげていくのか。また生活づくり等共通の課題として今後も検討が必要です。

4. 「育てたい力」の考察

「実践を通して、中学部時期に育てたい力について考える」として検討をすすめて、二年目となります。

ここでいう実践とは、現状の教育課程のもとで日々繰り返されている学習や生活、また特別活動も含めた教育活動全てにあたります。なかにはこれまで継続して取り組まれてきているものも多くあります。また課題学習のように、その理解や内容が人やクラスによって若干ずれてきていることも否めない事実であります。改めてそのひとつひとつを目の前の生徒たちに引き寄せ、ふり返り、まとめ、共通の理解と新たな課題を見つめていく。その過程のなかで、育てたい力を考え、文章化し、明確化していくことにあります。

学部では、どの研究会も多くの発言を得ることができます。その発言をもとに整理したのが、次の「育てたい力の考察Ⅱ」です。前年度の授業研からまとめたもの考察Ⅰに、今回合同学習の検討等が出されたものも加味しています。

育てたい力の考察Ⅱ

・生活や活動を支えるからだや手指の力

(健康・生活リズムの確立)

・安心安定の関係をもち、人や物に向かう力

・相手を感じる力 相手に合わせる力

人と結ぶ力(コミュニケーションの力)

・変化や結果をイメージする力 期待する力

・自分で考え行動する力 最後までやる力

(自己コントロールの力)

・目標に向かう力

・してきたことをふり返る力 修正する力

・自分の思いを伝える力

・困ったとき援助を求める力

・様々な集団のなかで活動できる力

・学力、わかってできる力、認知

次に学部研でこれを学校要覧に掲げられている教育目標「育てたい力」の4つ、「健康なからだ」「自分で決める力」「共にくらす力」「すすんで取り組む力」に分け入れて見ましたが、入り切らないものもありました。

考察Ⅱのように、こうしてあげてきた育てたい力をいつでも立ち返ることのできる「おおとの育てたい力」の柱立てを設定し確認していく必要があります。合わせて学校の教育目標はじめ学部の教育目標との関連性についても検討が必要です。そして各学部とのつながりについても論議を深め、確固たるものにしていければと考えます。

5. これからの課題として

(1) キャリア教育についての検討を進めて4年、「対外的な発表の場を」設定することとなりました。この機会を節とし本校における教育課程の整理検討を進めていく時期であると考えます。

その節目の年に向け、授業研究や実践報告を通して、キャリア教育の視点にそった実践を積み上げていくことが大切です。

(2) これまで整理検討してきた、育てたい力についてのまとめの時期となります。次のようなことを中心に検討していきます。

- ① 中学部独自となる長二中との交流、集団演技の取り組み、チームの取り組みなど学部集団づくりの視点にたった検討とそのなかでの育てたい力の考察Ⅲをすすめます。
 - ② 考察を続けてきた、育てたい力についてのまとめを行います。ただこれは学部研究からの提起に終わらず、学部運会ははじめ教務部や進路部との連携も図りながらの提案としていければと考えます。
- (3) 集団論議と共通理解を徹底しながら、本校の中学部らしさも大切に、教育目標はじめ教育課程の整理検討を進めます。